W-4

ワークショップ 構文形態論の新地平: 複合語・繰り返し・「語」の境界[*1]

長屋 尚典
東京大学
nagaya@l.u-tokyo.ac.jp

ワークショップの構成

企画・司会・コメンテーター: 長屋 尚典

発表者: 氏家 啓吾、高城 隆一、島田 翔平、鈴木 唯、茂木 洸太朗

[1] 趣旨説明: 構文形態論の導入・ワークショップの趣旨説明 (長屋)

[2] 研究発表:

(i): 「広島方言における 2 つの『よう＋否定』構文の構文形態論的分析」 (茂木・高城)

(ii): 「英語複合語 *N-s-man* の構文形態論的分析: 属性叙述と *spokesman*」 (島田)

(iii):「指定コピュラ文の意味構造をもつ NN 複合語の構文スキーマ」 (氏家)

(iv):「トルコ語の反復と重複: 形態論と統語論の境界を考える」 (鈴木)

[3] 全体討論: 司会による論点整理ならびにコメント・会場からの質疑応答

企画趣旨

構文形態論 (Construction Morphology) は**構文的アプローチによる形態論、特に語形成に関する理論**である (Booij 2010)。2005 年以来 Geert Booij によって開発が進められ、現在では有力な形態論理論のひとつとなっている。その理論的特徴は大きく 3 つある。第一に、言語知識を**構文 (construction)**、すなわち**慣習的な形式と意味のペア**のネットワークとして捉え、それを形態論の分析に用いる。構文的アプローチにおける「構文」は、文だけでなく句、イディオム、語など複雑さも抽象性もさまざまな記号を含んでおり、構文形態論では合成語もそのような構文 (の事例) として分析する。

第二に、形態素ではなく**語を最小の構文的単位**と考える。語を形態素が単に連結したものとは考えない。接辞はそれ自体では語彙項目ではなく、構文スキーマの一部として初めて意味記述も可能なのであり、また、レキシコンにも登録されると考える。さらに、レキシコンには、語だけではなく、統語的な振る舞いをする一方で、名付け機能を持ち慣習化された意味を持つ**句的語彙素 (phrasal lexeme)** も語彙項目として含まれている (例: ドイツ語やオランダ語の分離動詞など)。

第三に、**使用基盤モデル (usage-based model)** の立場に立つ。形態論的分析においても実際の言語使用からボトムアップ式に抽象化されるスキーマとして一般化を試みる。構文の集合体であるところの construct-i-con には単純語も合成語も構文スキーマも含まれており、具体的な語から抽象的なスキーマまでの階層的なネットワークをなしており、その中間にはサブスキーマ (subschema) が存在する。

このような特徴を持つ構文形態論の分析は**構文スキーマ (constructional schema)** (とそのネットワーク) として表現される。たとえば、英語の動作主名詞形成接尾辞 *-er* は、*baker*、*painter*、*seller* などの実際の使用から、(1) のような構文スキーマの一部として一般化できる。同様に、英語の NN 複合語も、インドネシア語の名詞完全重複 (e.g., *anak~anak*「子どもたち」) も、それぞれ (2)(3) のように一般化できる。

[*1] 本稿に関する内容については以下の方から貴重な意見および情報をいただいた: 石塚政行、氏家啓吾、島田翔平、鈴木唯、高城隆一、茂木洸太朗 (敬称略)。本発表は JSPS 科研費 JP18K12366 (代表: 長屋尚典)、JP17H02331 (代表: 峰岸真琴)、JP17H02333 (代表: 田窪行則)、JP19H01264 (代表: 松本曜) の助成を受けたものである。

(1) $\langle[[x]_{Vi}\text{-}er]_{Nj} \leftrightarrow [\text{PERSON who PRED}_i]_{SEMj}\rangle$

(2) $\langle[N_iN_j]_{Nk} \leftrightarrow [\text{SEM}_j \text{ with relation R to SEM}_i]_{SEMk}\rangle$

(3) $\langle[N_iN_i]_{Nj} \leftrightarrow [\text{PLUR SEM}_i]_{SEMj}\rangle$

これらの構文スキーマ (1)(2)(3) は全体で語の形式 (左側) と意味 (右側) の対応関係を表現している。たとえば、(1) において接尾辞 *-er* は独立した単位をなさず、あくまで (1) という語の一部として存在する。(2) において NN 複合語の意味には、個々の N の意味 (SEM) だけでなく 'with relation R to' という構文自体の意味も含まれている。これらの構文スキーマは実際に存在する合成語を「動機付ける」機能をもつと同時に新語形成方法も指定する。このように構文として合成語を分析することで、合成語の構成的 (compositional) な面も非構成的な面も同時に捉えられる。

本ワークショップは、この構文形態論という枠組みで形態論現象を分析することで、この理論の有効性を明らかにし、形態論一般に貢献する。具体的には、以下の論点について構文形態論の立場から検討する。

- **[論点 1] 構文的アプローチは形態論研究においてどれほど有効だろうか?** 形態論現象の慣習性や (非) 構成性の分析にどこまで有効だろうか? 形態素ベースの形態論では捉えられない現象が捉えられるだろうか? 他のアプローチでは明らかにできないことが明らかにできるだろうか?
- **[論点 2] 「語」とは何か?** 構文形態論は語ベースの分析を採用する一方で、句的語彙素も分析の対象とする。各言語における語の認定方法が常に問題となる。とりわけ、Haspelmath (2011: 68) は語を出発点とする構文形態論の立場に批判的であるが、通言語的概念としての (形態統語論的な)「語」は存在しないという彼の提案はどのように考えたらよいだろうか。
- **[論点 3] 形態論と統語論の関係はどのようなものだろうか?** 論点 2 は文法理論のアーキテクチャにおいて形態論と統語論の区別をどのように理解するかという問題と結びついている。句的語彙素や統語的複合語のような形態論と統語論にまたがる現象をどのように分析し、形態論と統語論の区別を前提とする重複・反復のような現象をどのように理解すればよいのだろうか。

各発表の要点は以下の通り:

- **[第 1 発表 (茂木・高城)]** 広島方言「よう-V-否定」構文は、副詞が動詞を修飾している統語構造に見えるが、音韻論的にも形態論的にも 1 語であり、不可能という非構成的な意味を持つ形態論的構文である。
- **[第 2 発表 (島田)]** 英語の複合語 *N-s-man* 構文は、属格構文という句を由来とする複合語であるが、この構文の形と意味の規則性、構成性、拡張は階層的なレキシコンによってうまく捉えることができる。
- **[第 3 発表 (氏家)]** 日本語には指定文を基盤とする NN 複合語が存在する。これらの指定文型 NN 複合語は、1 語らしい特徴とともに 1 語らしくない「統語的」性質もあわせもっており、ある種の動詞由来複合語とともに、形態論と統語論の区別の再考を要求する。
- **[第 4 発表 (鈴木)]** トルコ語の繰り返し現象の特徴は、語を基準に重複と反復に分けただけではうまく捉えられない。ある種の反復を統語的複合と分析することで、重複と反復の区別は維持しつつも、重複と反復の共通点を捉えることができる。

参考文献

Booij, Geert. 2010. *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.

Haspelmath, Martin. 2011. The indeterminacy of word segmentation and the nature of morphology and syntax. *Folia Linguistica* 45(1): 31-80.